

「学習・教育支援の場としての図書館」

理事・附属図書館長 松山 春男



図書館は大学のキャンパスの顔です。多くの大学の図書館は、大学の門を入れて正面に位置しているか、あるいはキャンパスの中央に位置しています。室蘭工業大学の図書館はキャンパスの中央に位置し、講義棟および教育・研究棟からも気軽に行けるアクセス性の良いところにあります。

IDE 大学協会(英文名称: Institute for Development of Higher Education)が発行している「現代の高等教育」(No. 510, 2009年5月号)では、「学習環境としての大学図書館」をテーマとして特集を組み、学生が主体的な学習を行える環境を大学が提供する時に、図書館を中心とした取り組みが重要である、という提案をしています。本稿では、この特集記事の要点を紹介しながら、室蘭工業大学の図書館としてどのようなことができるのかを考えてみたいと思います。

特集のねらいとして、次のようにまとめられています。「いま大学図書館は過去の知識の蓄積というこれまでの、いわば後ろむきの役割の問い直しを、強く求められています。知識生産の基盤となるのは、絶えず増大していく過去・現在の知識と情報の効率的な検索です。そこでは図書館の、情報技術を駆使した高度の専門的サポート機能に、ますます大きな期待が寄せられるようになっていきます。さらに重要になっているのは、大学教育の高度化をはかる上での、基盤的要因としての図書館の役割です。

大学教育の高度化を実現する重要なカギの一つは、学生の主体的な学習です。一人ひとりの学生が、多様なメディアを通してえられる情報や知識を活用しながら学習し、議論をたたかわし、交流を深め、知の質と水準を高めていく、そのための物理的な場所と人的なサポートの場としての図書館。そうした期待に大学図書館はいま、どのようにこたえようとしているのか。改革の最前線をとらえ、紹介したいというのが、特集の狙いです。」(注1)

大学図書館の機能として、(1) 学術機関における学術情報(知識)の蓄積と提供、(2) 場所としての図書館、があります。(1)に関して、大学の教員および学生は、電子ジャーナル他のデジタル情報資源に依存する度合いが増しており、どこでもアクセス可能なので図書館という場所に来なくても利用できる状況があります。現在の研究大学における図書館の最大の課題は、国際的な電子ジャーナルのコスト増にいかに対処するかということです。電子ジャーナル市場は、少数の国際的学術出版社が提供する寡占構造がつくられており、電子ジャーナルパッケージのライセンス販売が行われて、年々数パーセントの価格高騰があるだけでなく、新しい研究分野がつくられるにつれて、どんどん収録誌数が増えていきます。これに対して、国立大学図書館協会などい

くつかの団体が、コンソーシアムをつくって交渉を行ってきていますが、厳しい状況には変わりありません。電子ジャーナル利用は、利用する権利を年度単位で購入する契約方式ですので、冊子体の雑誌と違って、保存資料として残すことができません。だから、バックナンバーを含んだ遡及的なコレクションとするためには、さらに料金がかかります。(2)の「場所としての図書館」に関しては、最近注目されているラーニング・コモンズという考え方があります。コモンズは共有地という意味で、公的セクターと私的セクターのいずれでもない、私の領域に属するものを相互に利用し合う仕組みとして、注目されています。キャンパス内にある学習用の施設であって、そこではネットワークを通じて情報を収集したり、PCでそれを編集したり、本や論文を参照して知識を獲得したりできるほか、お互いに議論できるようなグループ学習スペースが備わっています。とくに重要なのは、個人ベースの知識や情報獲得だけでなく、グループ学習や相互交流に対応できるようにしていることと、ネットワークからの情報と本からの情報のいずれも入手できるようにしていることです。キャンパスでこうした条件をすべて備えたところは、これまでなかったから、図書館以外にも食堂、屋外のベンチや芝生、寮の談話室などが個別にそうした用途に使われていました。図書館を部分的に改造してラーニング・コモンズをつくる意義は、共同学習スペースをつくり、ネット接続のPC端末をたくさん置くだけで、比較的容易にこの目的が達成できることが挙げられます。何よりも、図書館がキャンパスの中心に置かれ、従来から大学で扱う知の全体像をカバーし、最近ではデジタル情報環境にも積極的に対応していることで、こうした機能を果たしやすいこととなります。(注2)

室蘭工業大学図書館には、1階に学生がいつでも利用できるPC機器を設置したコーナーがあります。平成20年度に、それまで2階に設置していたPC機器を1階に移動し、学生がより快適にPC機器を利用できる環境をつくりました。また、レポート

の作成時には、学生たちは閲覧室のテーブルを囲んで図書館の本を見ながら、グループでレポートの作成を行っています。平成21年度からは、学生サポートとしてピア・サポートのティーチング・アシスタント(TA)の学生が腕章を着けて図書館におり、試験準備期間中には学生の勉学に関する相談にも対応してくれるようになりました。

5月号の特集の中には、学生の学習支援に取り組んでいる大学の実例が多く紹介されています。その中の1つに、お茶の水女子大学の「学生協働サポート体制」があります。学生のボランティア・スタッフを公募して、初年次の学生の図書館利用をサポートするものです。ボランティア・スタッフは、自分自身が図書館を利用しながら、図書館の利用に慣れていない学生の質問を受けるというもので、ボランティア・スタッフ優先席の机上にバルーンを立て、「質問を受けますよ」という目印にしています。ボランティア・スタッフには、よく図書館を利用する学生が応募しているため、利用者の目線で、図書館の新しいスペースの紹介や、図書館の活用法についての「図書館だより」を作成してもらっているそうです。

本学の図書館でも、他大学の良いところを参考にさせていただき、「学習支援」や「教育支援」の場としての図書館をつくる取組をしていきたいと考えています。今後とも、図書館を積極的に利用していただくとともに、ご利用上のご意見、ご希望を私および図書館職員にお寄せくださいますようお願いいたします。

(注)

- 1) IDE 大学協会(英文名称: Institute for Development of Higher Education)が発行している「現代の高等教育」(No. 510, 2009年5月号)の特集のテーマからの引用。
- 2) 根本彰「大学の図書館の新しい見方」『現代の高等教育』(No. 510, 2009年5月号)からの引用。